

## 学部創設 30 周年に寄せて

田島 陽一

国際関係学部創設 30 周年おめでとうございます。卒業生として、今日の国際関係学部の発展を大変嬉しく感じております。そしてこれも、これまでの教職員の方々のご尽力と後に続いてくれた後輩諸君の努力によるものと、心から感謝申し上げる次第です。

私は国際関係学部入学から国際関係研究科の修士課程および博士課程進学に至るまで、常に第一期生として初期の国際関係学部・同研究科と歩みを共にしてきた者です。研究生の期間も含めて、10 年間立命館大学にお世話になりました。

私が立命館大学に入学した理由は、まさに国際関係学部が創設されたことによるものでした。実は私は他大学への進学をずっと希望していたのですが、国際関係学という新しい学問分野を学びたいという気持ちと錚々たる先生方の顔ぶれに惹かれ、悩みに悩んだあげく、立命館大学への進学を決意するに至りました。著名な評論家の加藤周一先生、伊藤忠商事元会長の伊藤英吉先生、従属論の大家であるテオトニオ・ドス・サントス先生、そして国際関係論の関寛治先生など、非常に豪華な顔ぶれの先生方の授業に参加させていただいたことを、いまだによく記憶しております。

学部生の時は「国際関係学研究会（通称：IR 研）」という学術系サークルに入り、同期生や後輩と週 3 回ほど勉強会等を開催していました。一回生の時には、現立命館大学法学部教授の徳川信治先生にチューターになっていただき、研究の内容だけでなく、研究に向かう姿勢についても真摯にご指導いただきました。また IR 研の立ち上げに際し、武者小路公秀先生をお招きして講演会でお話し頂いた際には、稚拙な内容でしたが先生に質問させていただいたことも懐かしい思い出となっております。先日国際関係学部のホームページから IR 研が今日も存続していることを知りました。各代の後輩達によって研究会が引き継がれていたことを感慨深く感じるとともに、時代は変わっても「学びたい」という学生の気持ちは変わらないのだと嬉しく思いました。

ゼミは開発経済学を専門としておられる中村雅秀先生の下で学ばせていただきました。経済学を学ぶ学生にとって、国際関係学部および国際関係研究科には多くの優れた先生方がいらっしゃる、その薫陶を受けられたことも私にとって誠に幸運でした。後に日本国際経済学会の会

長になられる世界経済論の朝日稔先生、国際金融論の奥田宏司先生、発展途上国経済論の森野勝好先生、そして今日も国際関係学部で教鞭をとっておられる多国籍企業論の板木雅彦先生には、とくにお世話になりました。他にも経済学という分野を超えて、ここではお名前を書ききれない程、多くの先生方から学恩を受けました。

大学院生となって大きな喜びだったのは、修学館の書庫を自由に利用できるようになったことでした。書庫は我々研究する者にとっては資料が蓄積された、まさに「知の宝庫」でした。当時、修学館に文系の先生方の研究室が集まっており、各階には各研究科の共同研究室が置かれ、そこで最新の雑誌や研究書を拝見できたことも研究を進める上で大きな刺激となっていました。我々は多くの資料をほぼ一ヶ所で入手できるという高い利便性を当たり前のように享受していたのですが、後に就職のために立命館大学を離れたとき、それまで自分がいかに恵まれた研究環境にいたのかを痛感することになりました。

また、修学館には文系の大学院生の共同研究室も置かれてあり、ここで様々な専門分野の院生諸君と出会うすばらしい機会に恵まれました。ほぼ同時期に国際関係研究科で学んだ院生の中には、立命館大学国際関係学部の中戸祐夫教授・白戸圭一教授・中本真生子准教授、立命館大学産業社会学部の高嶋正晴教授、奈良女子大学連合教職開発研究科の鮫島京一准教授、北海道大学公共政策大学院の鈴木一人教授、駒澤大学経済学部の中中綾一教授および小西宏美准教授、和歌山大学研究グローバル化推進機構国際連携部門の藤山一郎准教授、世界銀行東京事務所の森功一氏という方々がいらっしゃいました。振り返ってみれば、多くの逸材がそこに集い、彼らと交流できたことも私にとって僥倖でした。

私が立命館大学を離れた後も国際関係学部は絶えず革新を遂げ、今日非常に高い社会的評価を受けるようになっていきます。今後も立命館大学の国際関係学部がますます発展し、日本と世界における国際関係学を牽引していくことを心より願っております。そして私も卒業生の一人として、国際関係学部出身の名に恥じないよう精進を続けて参ります。

(田島 陽一, 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授)